

知事随想



島根県知事

溝口善兵衛

大都市と地方

—東京から島根に戻って思うこと

平成十九年春の選挙で、四十三年振りに東京から郷土の島根にUターンして知事に選出され、地方から国を見るようになって感ずることが多々ある。

私は島根県西部、益田市で生まれ、県都松江に住むのは初めてだ。松江は四百年前に開府され、江戸時代は長く親藩松平家の所領であり、市内には城下町の趣がよく残っている。松江に住むようになって初めての年の秋のある宵、会合後のほろ酔い気分で公舎までの道を歩いていたとき、同じ町内の顔見知りのIさんに声をかけられた。「こっちへきて鑿を打ってみませんか」。町内の皆さんの鑿打ちの練習に誘われたのだった。以来、時折、勝手参加させてもらっている。

鑿とは、四尺(一・二m)から六尺(一・八m)ほどもある大きな太鼓のことで、毎年秋には、鑿を二〜三台据えた屋根付き山車を子供達数十人が綱で引き、何台も連ねて市内を行列する「鑿行列」という祭りが行われる。江戸中期頃、松江藩主に京都の伏見宮家から姫君が降家された際に町民が「鑿」を打ち鳴らして祝ったのが始まりのようだ。

鑿を打つのは音感の乏しい私には結構、難しいのだが、皆に合わせようと気合いを入れ、体を動かして大きな音を出すのは気分がいい。練習の後に、近所のメンバーの家に大人も子供も皆集まり、互いに持ち寄った料理などを囲んで賑やかに歓談するのが、また楽しい。親子三代で参加している家もある。

私は島根の良さについて語るとき、「豊かな自然や伝統、文化」に加えて、いつも「温かい地域社会と人間関係が島根にはある」と話している。こうした地域社会が、残っているということが島根の大きな強みだが、大都市部ではこうした潤いのある地域の人たちとのつながりはなくなっている。東京などでは自由だが孤立した人々の生活が、いろいろな大都市の問題の背後にあることを、今、実感している。

知事になって次に気づいたことは、日本全体の少子化・人口減少問題は、地方ではなく、実は、大都市で、人口を再生産できなくなったことにあるということである。日本全体の出生率は近年大きく下がってきて一・二七になっているが、島根は一・五一とまだ高い。これに

対し東京は全国で最低の一・〇九だ。地方部が高く、大都市で低いのは顕著な傾向である。

大都市は便利で刺激的でさまざまなチャンスがあり若者を惹きつける。しかし、そこでの生活は決して楽なものではない。通勤は満員電車で時間もかかる。住居は狭く家賃も高い。共稼ぎでも生活は大変で、子育ては容易ではない。

一方、地方は職住近接で住居費も安く、自然が豊かで生活と仕事のリズムが安定している。子育てもしやすい。つまり、生活がしにくく、子育てが難しい大都市に若者を集め過ぎるから日本全体の出生率が低くなり、日本の人口が減り、日本の活力の低下が懸念されているのだ。

こうした大都市が抱える問題を考えると、私は、政治の仕組みとして「分権 (decentralization)」を進めることは必要だが、もっと必要なのは「分散 (deconcentration)」ではないかと考えている。そして、この「分散」の必要性は、今後の日本の発展の仕方と大きく関連している。

かつて日本がそうであったように、今、中国など後発国が先進国に追いつこうとしているが、この過程では中央集権的な発展の途を辿らざるを得ない。日本は明治の開国以来、外国の高い学術、技術、文化を首都の中央官僚組織を通して導入し、これを地方にも伝播していくという方法をとったが、それが効率的であったからだ。

しかし、今の日本のように欧米先進国に追いついてしまうと、その方法は途端にうまく機能しなくなる。それまでのように外から良いものを取り入れるだけではだめで、自分たちで新たに創り出していかなければならなくなるからだ。そのためには、同じような経験、感覚や考え方を持った有能な人が一人いるよりも、異なる発想や変わった考えで新たなことにチャレンジする人が千人いるほうが、多分、有効だろう。そうして、そうした人たちが多く出てくるためには、人は、大都市の密集や喧噪ではなく、ゆったりした自然豊かな環境や各地域で意志決定をする仕組みを多分必要とするのだろう。

ということは、日本が先進国にキャッチアップする過程で大都市に集中させてきた企業、大学、研究機関、文化施設などを、今度は逆に自然豊かな地方に分散させる必要が生じていると考えるべきだろう。

これ以上大都市を拡大させ続けても、日本全体の少子高齢化などの大問題は解決しない。日本全体でバランスが取れるようにすることが必要であり、そのためには、地方をもう少し重視した政策をとることが必要なのだ。自立した豊かな地方ができてはじめて、真の分権が実現できるのではないかと思う。

